

ケルト文化復興とアーノルド

——ヤフーとアイリーン——

日 下 隆 平

は じ め に

19世紀の後半、アイルランド側ではケルト意識が目覚めつつあった。また時を同じくして、イングランド側でも物質的繁栄の背後で抱く閉塞感と不安から、みずからの自画像の修正を行う必要がやむなく生じ始めた。こうしたなかで起きたイングランドでのアイルランド像の変化を、本論は文学作品や絵画を通して検討してゆくものである。19世紀末イングランドにおける芸術運動のなかで、ケルト文化復興は文学、美術の世界だけでなく、社会政治的側面からも重要な意味を持っている。ところで、サブタイトルで用いた「ヤフー」(Yahoo)とは、18世紀にスウィフトが『ガリバー旅行記』のなかで描いた空想上の民族であり、「アイリーン」とは世紀末の挿絵でさかんに描かれた女性の名である。両者は正反対の特徴をもつが、どちらもアイルランド人像を表現していて、異なる時代のステロタイプと見なすことができる。野卑、不潔、嫌悪の代名詞とも言える「ヤフー」、それに対して、愁いを帯びた表情の美女「アイリーン」がある。いずれも同じアイルランド人像でありながら、この両者にある落差は何を示しているのだろうか。この問題は、まさしく「ケルト文化復興」の本質と深い関連があるように思われる。また、このテーマを扱うにあたって、アイルランド側からすれば、民族意識によるモチーフの発掘過程の検証が大切なのは言うまでもないことである。しかしそれにも増して、イングランド側でそのモチーフが、ケルト像形成にどのような影響を与えていったのかを検討することは重要であろう。

「ケルト」の用例をみると、イングランドでチュートン、サクソンとは際立つ民族・地域的特色を意味するものとして、「ケルト」という用語が使用され始めたのは、それほど古いことではない。*OED* によれば、保守党の政治家ソールズベリー侯爵 (Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil 1830-1903) が、1890年、「パーネルとアイルランド問題」で、「目下最大の問題は、二島のケルト的外辺部に住む人々の議員数が残りのアングロ・サクソンに比べると少数で、均衡をひどく欠くことだ」と、述べている。ここでは、「ケルト」は、アングロ・サクソンであるイングランドと区別され、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、コーンウォール、マン島などを指している。1890年代には「ケルト的周縁」(Celtic fringe or edge) という語がたびたび見受けられるようになった。さらに、1894年にはウェールズの言語学者ジョン・リース (John Rhys) による「ブリテン島はケルト世界に属さぬものと考えられてきた」(『ケルト的ブリテン島』) という表現がある。また、彼は1870年代末からウェールズとマン島に伝えられる民話を収集して1901年に『ケルトの民話』(*Celtic Folklore*) として刊行している。1893年には、W. B. イェイツはアイルランドに伝わる民間伝承を集め、『ケルトの薄明』(*The Celtic Twilight*) と題する民話集を出版した。それ以降、イングランド周縁部のケルト的要素、とりわけアイルランド民話に関連した芸術的要素という意味合いが加味されていった。

イングランド外辺部の民族として、或いは植民地として「ケルト」は、支配者側のサクソン、チュートンに、イングランドのアイデンティティ形成の面で、興味深い役回りを歴史的に演じてきたといえよう。ケルト意識とは、いわばコインの裏と表であって、民族意識に目覚めてアイルランドやスコットランドなどで生まれたものと、イングランド内部でアーノルドなどによって創り出されたものとの両面から捉える必要がある。そして双方からの相互作用によって、世紀末のケルト意識が生み出されていったといえよう。世紀末ケルト意識はこのような観点をぬきにして考えることはできない。

1 ケルト的モチーフ

ここでは先ず、民族文化の財産としてケルト的モチーフが発掘されてゆく過程を、例をあげながら概観してゆきたい。シェイマス・ディーンによれば、文学にみるケルト復興は二つの時期に分けて考えられるという。¹ 第一次ケルト復興が起きたのは、1760年のジェイムス・マクファーソン (James Macpherson 1736-96) によるスコットランド高地地方に伝承される古歌『オシアン』(*Ossian*) を英語に翻訳して発表した頃であった。つづけて、シャーロット・ブルック (Charlotte Brooke) による『アイルランド古詩拾遺選』(1789)、バンティング (Edward Bunting) の『アイルランド古謡』(1796)、さらによく知られたトマス・ムア (Thomas Moore 1779-1852) の『アイリッシュ・メロディ』(*The Irish Melodies*, 1808) 等が生まれた。これらの文学作品は後にロンドンのサロンでのケルトブームの道を開くものとなった。こうした作品の中にあって、トマス・ダーシー・マギー (Thomas D'arcy Mcgee 1825-1868) による「ケルト」と「ケルト十字架」という、つぎに引用する二つの詩はアイルランドの人々がみずから文化を発掘しようとしたことがよくわかる。

ケルト

何千年かの昔、もやの立ちこめたところのかなた、
古代アイルランドには力強い民が住んでいた。
その背 ローマ人の槍より高く、
その優美さ オークや塔のごとし、
鹿のように軽やかな足をもち、
風と波を住处にしていた。

THE CELTS

Long, long ago, beyond the misty space

Of twice a thousand years,
In Erin old there dwelt a mighty race,
Taller than Roman spears;
Like oaks and towers they had a giant grace,
Were fleet as deers,
With wind and waves they made their 'biding place,
(1000 Years of Irish Poetry, p. 518)

ケルト十字架

嵐と炎と暗闇の向こう側に、私は見た。
十字架がしっかりと、安定し高々と直立しているのを。
そのなかでも、我が祖国を印すケルト十字架。
その台座のまわりで、
ドルイド僧、デーン人、サクソン人がむなしくも力をふるった。
それは重なる衝撃や時代の風雪にも耐えてきた。
我が四散した民族の星。

THE CELTIC CROSS

Through storm and fire and gloom, I see it stand
Firm, broad, and tall,
The Celtic Cross that marks our Fatherland,
Amid them all!
Druids and Danes and Saxons vainly rage
Around its base;
It standeth shock on shock, and age on age,
Star of our scatter'd race.
(1000 Years of Irish Poetry, p. 520)

さらに、トマス・ムアによる『アイリッシュ・メロディ』にはつぎのような部分がある。

かつて、タラの大広間に
音楽の魂が 弾き鳴らしたハーブ
いま タラの壁に
その魂が消えたように
静かに吊られている
昔日の誇りは眠りにつき
震えるごとき栄誉は止む
かつて 賛美におののいた心も
いまはもう鼓動を聞かぬ。

The harp that once through Tara's halls
The soul of music shed,
Now hangs as mute on Tara's walls
As if that soul were fled.
So sleeps the pride of former days,
So glory's thrill is o'er,
And hearts, that once beat high for praise,
Now feel that pulse no more.

(The Field Day Anthology of Irish Writing, p. 1060)

ここには神話に由来するアイルランド独自のモチーフとして、ハーブが描かれている。かつての栄華を偲ばせるハーブはアイルランドの表象となっている。ダーシイによる「ケルト」と「ケルト十字架」とともに、ハーブはアイルランドナショナリズムの表象となった。² また、トリニティ・コレッジの学生であった頃から、ムアはエメットとの交遊を通じて、政治的運動にも

強い関心を寄せ始めたと言われる。

アイルランドよ。あなたの目の笑みと涙が、
空にかかる虹の如く混じり合い
悲しみの涙を輝かせ、
喜びの光を曇らせるのだ。

Erin, the tear and the smile in thine eyes,
Blend like the rainbow that hangs in thy skies!
Shining through sorrow's stream,
Saddening through pleasure's beam,

(The Field Day Anthology of Irish Writing, p. 1059)

つぎのスタンザでは、「虹の光が混じり合うように、色合いがひとつになるまでは、安らぎを迎えて涙が消えることもなければ、笑みが増すこともない」と続けて、国家意識を述べている。『アイリッシュ・メロディ』は、バンティングの収集した哀愁に満ちたアイルランドの旋律に、ムアがつけた歌詞は、古きアイルランドの過去を懐かしむ内容となっている。当時の評者の一人は、その歌のナショナリスティックな特徴に警告を発しているものの、ムアのメロディは大成功を収めた。

しかし、よく知られているように、1848年はヨーロッパ全域で革命の波が襲った時期である。そして青年アイルランド党の反乱（1848）にみられるように、アイルランドにもその余波は押し寄せた。しかもリピール運動の指導者オコーネルの死、さらには深刻な馬鈴薯飢饉など、度重なる悲劇によって、このような流行もいったんは消滅したかに見えた。

だが、この状況の下でもケルト復興の火は完全には消えることなく残り、ほどなく第二次ケルト復興に結びついていった。それは、ディーンの言葉を借用すると、以前にもましてはっきりとした「ケルト」の特徴をとりながら

進行していった。サミュエル・ファーガソン卿、ウィリアム・カールトン、ジェイムズ・クラレンス・マンガン等の著作、デイヴィスのエッセイ、そして『ネイション』の俗謡などがその下地をつくった。さらにスタンディッシュ・オグラディの『アイルランドの吟遊詩人の歴史』が1878年に著されるとともに、ケルト復興はもはや明確なかたちを持つにいたった。第二次ケルト復興が以前と異ならしめた最大の要因は、当時のゲール語研究ブームである。アイルランドには、シングの『アラン島』にも述べられているように、アメリカやヨーロッパ大陸から何人もの言語学者が訪れていた。また、アイルランドの土には飢饉による多数の犠牲者だけではなく、女神フィアナも眠っていた。言い換えると、ゲール語と文学が一旦は死滅した文明を人々の記憶に蘇らせることによって悲惨な現実から立ち直る勇気を人々に与えた。さらに飢饉のあと目覚めた、土地への渴望がみずからの過去への憧憬を生みだしていったと言えよう。

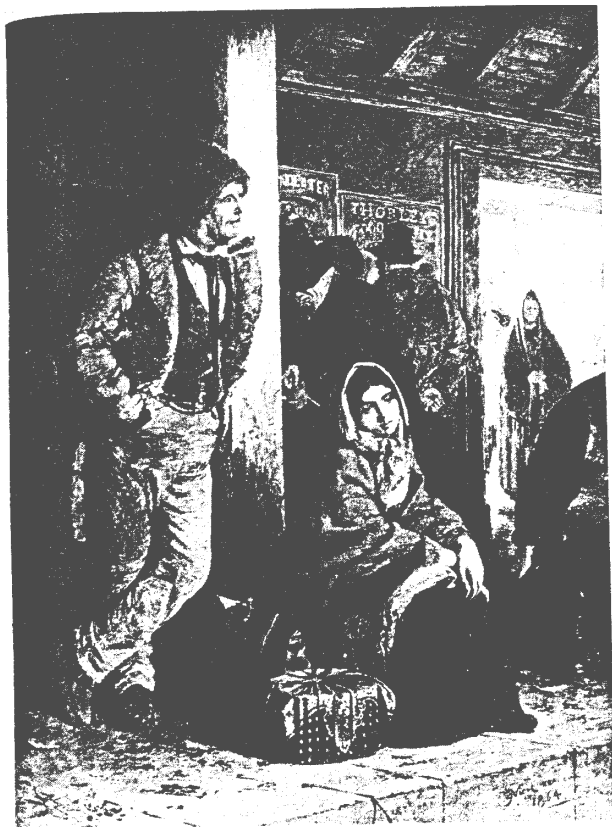
絵画におけるケルト的モチーフが表現され始めたのは、文学に較べると、かなり後になってからのことであった。最初にケルト的モチーフが扱われたのは、アイルランドで活躍したのち、イングランドで成功を収めナショナル・ギャラリーの館長を20年間も務めた、フレデリック・バートン (Frederic William Burton 1816-1900) の頃からであるといわれる。彼は水彩画を得意とし、アラン島の民衆生活に題材を求めた『溺れたアラン島民の子供』 (*The Aran Fisherman's Drowned Child*, The National Gallery 1841) などケルト的題材による絵画を描いた。³ その後、1840年代には、「青年アイルランド党」の機関誌『ネイション』をはじめとする民族運動の雑誌に、彼は口絵や挿絵を手がけた。そのひとつに、愛国的なバラッドや詩を集めた『国家の精神』に、ハーブ奏者と女性が、フィンの魂を象徴する日の出を眺めている口絵がある。アイルランド神話に由来するハーブはアイルランドを、フィンはそのアイデンティティを表現しているが、この絵のフィンは「戦う」ケルト像の表象である。これは、19世紀のイングランドからみた植民地としてのケルト像を示すものとなった。

ゲーリック同盟は「アイルランドの脱イングランド化」を目指すものであった。したがって、ケルトのイメージには、政治的意味が加味されて、戦う「男性的」要素が色濃く出たのもこの頃の特徴と言える。これを示す例として、この頃に強い愛国心を表すものとして、獐猛なアイリッシュ・ウルフハウンド（狼犬）が使われた。フィンとアシーンとともに、「男性的」イメージが定着していったことを示すものとなっている。19世紀末には、キリスト教（パトリック聖人）への帰依を拒むアシーンという構図を用いることで、イエイツはキリスト教世界とケルトの世界を対峙させることで、物質世界と精神世界、あるいは政治的メタファーとして、ユニオニストとカトリック下層階級との対立を表現してみせた。

こうしたケルト像とは違って、当時の社会面からケルト的モチーフを描いた画家もいる。ニコル（Erskine Nicol 1825-1904）はスコットランドの出だったが、数多くのアイルランドのモチーフを描いた。彼の『国を去る人々』（*The Emigrants*）[第1図]では大きな荷物を手に船を待つ疲弊した女性が描かれ、当時のアイルランドの悲劇を浮き彫りにしている。

2 「ヤフー」のイメージ

植民地時代のイングランドのアイルランド人像は、エリザベス朝時代の詩人エドマンド・スペンサー（Edmund Spenser 1552-1599）に代表される。スペンサーは16世紀末にアイルランド総督グレイ卿の秘書官としてアイルランドに渡ったあと、コークに住んで著述を続けた。そこで、彼は『妖精女王』（*The Faerie Queene*）を書き上げるかわり、『アイルランドの現状について』（*A View of the Present State of Ireland*, 1596）を書いた。その中で彼はアイルランドの住民を野蛮極まりない民族とみなしている。スペンサーの態度には、反抗的なアイルランド人を嫌悪の対象とする一方で、その牧歌的な風景への愛着が感じとれる。彼のアイルランド人観は偏見に満ちている。野蛮極まるアイルランド人は撲滅されるべきだとまで言い切るほどの、まことに大胆な提言すら述べている。スペンサーは、こうした発言の反面、美しい



第1図 エルスキン・ニコル『国を去る人々』 Tate Gallery 所蔵

キルコルマン（Kilcolman）の風景は彼の詩のアルカディアであった。スペンサーにみるような好悪混在するアイルランド人像は19世紀末まで続いた。

イングランドにおけるケルト像を検討する上でもう一人重要なのは、プロテスタント・アセンダンシーの一人ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift）であろう。ピトックが指摘するように、アイルランド人を猿人として描く19世紀の風刺画のルーツは、スウィフトの『ガリバー旅行記』（1726）のヤフーにまで遡ることができる。⁴ ヤフーとはこの物語のなかに登場する

空想上の野蛮極まりない民族である。ある時、偶然ガリバーが湖や泉に映る自分の姿を見たときに、思わず自己嫌悪と恐怖の念にかられて顔をそむけてしまう。「まだ普通のヤフーの姿の方が、自分の風采よりずっとましだ」と彼を感じる件にもあるように、ヤフー（Yahoo）はガリバーの同国人の姿と重なり合っている。⁵ ここで、スウィフトは、フィヌム（Houyhnhnm）の理性とヤフーの獣性とを対照させることで、人間そのものを風刺的に表そうとしたのであろうが、ヤフーにはアイルランド人像を想起させるところが多々ある。さらに、フィヌムとヤフーは、形式上は支配と隷属という関係にあることから、当時のイングランドとアイルランドの関係のアルージョンであることが容易に想像できよう。現在になっては、このような見方はやや表層的過ぎる面もあるだろうが、C. H. ファースなどは、早くからヤフーを未開のアイルランド人の表象と見なしてきた。⁶ もっとも、その反面で、スウィフトはアイルランドの貧困を憂いて、説教集『アイルランド窮状の諸原因』のなかでアイルランドの窮状を改革する提案をしている。

さて、アイルランド人を蛮族と見なす記事は他にも多く存在する。たとえば、『パンチ』誌には、ロンドンやリヴァプールに住むアイルランド人について、「わけの分からぬ言葉」をしゃべり、「煉瓦箱を担いで梯子を登る」アイルランド人を「アイリッシュ・ヤフー」と呼び、「アイリッシュ・サヴェジ」の同義語として用いられた。以下原文のまま引用する。

It comes from Ireland, whence it has contrived to migrate; it belongs in fact to a tribe of Irish savages: the lowest species of the Irish Yahoo. When conversing with its kind it talks a sort of gibberish. It is, moreover, a climbing animal, and may sometimes be seen ascending a ladder laden with a hod of bricks.

The Irish Yahoo generally confines itself within the limits of its own colony, except when it goes out of them to get its living. Sometimes, however, it sallies forth in states of excitement, and attacks civilised human beings

that have provoked its fury.⁷

(下線部筆者)

さらにイングランドのアイランド人像の形成に一役買ったのは、当時の社会的要因である。そのひとつは1840年代の飢饉によるアイランド人移民と深く関連している。「リトル・アイランド」などのスラムがつくられた。民族、宗教、言語などを異にした貧しいアイランド人に対して、愚直、飲酒癖、凶暴といった否定的イメージがイングランドの人々の中で確立されていった。そのイメージはアイランド人特有のカトリック的宿命論と結びつき、スラムから脱出できない無気力な民族というアイランド人像が形成されていった。さらに、19世紀の新聞報道はアイランド人像の形成に大きな役割を果たした。たとえば『ブリストル・タイムズ』などの都市新聞は彼らをひどい訛で話す滑稽な人物として描いたのに対し、地方新聞のなかには、危険人物として描いたものもあった。だが、移民のピークが過ぎた1850年代になると、こうした事態も少しずつ改善されてきた。イングランドの経済停滞期がアイランド飢饉の時期と一致していたことが、否定的イメージ形成に拍車をかけたのであり、それ以降のアイランド人像に重要な影を落とした、という指摘もある。

アイランド人像はヴィクトリア朝のテニエルなどの風刺画にもよくみることができる。当時の『パンチ』誌をみると、フェニアン運動が高まったときには、彼らはヤフーとして猿人の如く、狂暴きわまりない民族として描かれた。[第2図]

とはいうものの、少数ではあるが当時のイングランドの中にもアイランド人の美点を評価する者もあった。たとえば小説家のサッカレー (William Makepeace Thackeray 1811-63) は1841年にアイランドを旅行で訪れ3カ月過ごした。アイランド系女性イザベラ・ショーとパリで知り合い結婚したのち、病気の妻の療養のためアイランドへ行く。そのときの印象を綴った『アイリッシュ・スケッチブック』(*The Irish Sketch Book*, 1842) のなか



第2図 ジョン・テニエル「二つの力」、『パンチ』誌 1881年10月掲載

で、彼はアイルランド人の機知と才気溢れる会話を聞いて魅了されている。このアイルランド最良の彼でさえ、「ある演説の名手がダブリン市長になっ

た時」, その人物の滑稽極まりない安ピカ趣味を軽蔑して, つぎのように述べている。

彼はつねにまっ赤なガウンに三角帽といういでたちで大いに悦に入っていた。ちょうど黒人女王が新しいカーテン・リングを鼻につけ, ガラス玉を首のまわりにかけて喜んでいるようなものである。彼はこの服装で公式訪問をし, 何百マイルと離れた場にも緋の衣を着て出席した。まわりの人間が「はい, 閣下」などと言っているのを聞いたり, その閣下の記事が新聞にデカデカと出ているのを見たりすると, まわりも本人もこんな安ピカ趣味にだまされることをけっこう喜んでいるとしか思えなかった。安ピカ趣味はまったくこの国全体のもので, アイルランド俗物の大特色と考えてよろしい。 (「アイルランド俗物」)⁸

サッカレーは, ある時期にはアイルランドを美化して, 当時のイングランドに失われた価値をアイルランド人に見いだすものの, その反面では, アイルランド人の俗物性をのちになると軽蔑している。

トロロープ (Anthony Trollope 1815-82) は, 周囲に反対されながらアイルランドに郵便検査官 (resident Post Office surveyor) として赴任してアイルランドをテーマに小説を書いた。彼は『自叙伝』 (*An Autobiography*, 1883) で「まもなく私はアイルランドの人たちが善良で賢く—労働者階級のなかにはイングランドの人々よりずっと理性的で—つましくもてなし上手なものがあることが分かった」と述べている部分がある。彼のアイルランド人像には, サッカレーと同じように, 美化したものが感じられる。

トロロープやサッカレーの反応は徐々に変化してゆくアイルランド人像を示している。だが, トロロープの態度には, サッカレーと同じように, 正反対の面もあったことも忘れてはならない。アイルランド自治については, 歳をとるにつれて, 彼の態度は頑なになり, 反対の立場を唱えるようになっていったことは興味を持たれる。フォスターによると, 歴史家ジェームズ・フ

ルード (James Anthony Froude 1818-94)、政治家ランドルフ・チャーチル卿 (Lord Randolph Churchill 1849-95) さらには作家カーライル (Thomas Carlyle 1795-1881) 達も、アイルランド自治については、トロロープと同様の態度をとった。彼らに共通しているのは、当初アイルランドに共感を覚えるものの、晩年になると変節しアイルランドの自治に反動的な態度を次第に取り始めていったことである。

さらに社会学的側面から、ギリー (Gilley) は、アイルランドの特質がイングランド社会の事情によって利用されてきた、と述べている。それによると、アイルランド移民がイングランド社会で社会問題となったのは、ほんの一時で1800年から1860年ぐらいの間ではなかったか、と指摘している。それどころか、本国に飽きたらない者たちにとって、植民地アイルランドは彼らが活躍できる格好の舞台ともなった。その後、アイルランド移民が目立たぬものになるにつれて、彼らの関心は薄れ、1870年代にもなるとアイルランド人は彼らの居住区から脱し、他のイングランド社会や都市の群衆の中に埋没していった。アイルランド人像はイングランドの国情に応じて変化し、いわばその社会事情を映し出す鏡ともいえた。19世紀中頃はアイルランド人が社会不安の因子として見る見方が強調されたわけである。また逆に、19世紀末にケルト文化復興運動がおきたとき、アイルランドは以前と異なる特徴が強調され、観念的存在へと変わっていった。この頃は未開の地アイルランドというよりも、アルカディアとしての牧歌的イメージが強調されたと言える。

以上、19世紀におけるイングランドでのアイルランド像の変化をみてきたが、その根底に流れているものの原点は、スペンサーにあった。親アイルランド家と目された人たちの中で、晩年には変節しアイルランド自治に反動的な態度をとった者が少なからずいたのは、決して偶然ではなかったと言える。

G. K. チェスタトンにはバーナード・ショーを論じるなかで、イングランドのアイルランド人に対する見方を、分かり易く述べている。チェスタトンは、

「大抵のイングランドの人々なら、アイルランド人にたいして本物の好意を感じているものの、しかし残念ながらその好意なるものは、実は現実にはどこにも存在しない類のアイルランドに向けて注がれるものでしかない」、⁹ と指摘している。

3 「アイリーン」としてのイメージ

19世紀の後半、第一節で述べたアイルランド側のケルト意識の芽生え、また同時に、イングランド側でも行き詰まった伝統的価値観の中で、やむなくみずからの自画像の修正を行う必要が生じ始めた。こうした双方の必要性によって、ケルト意識は目覚めてきたと言える。グラント・アレン（Grant Allen）は、1891年に『フォートナイトリー・レビュー』（*Fortnightly Review*）のなかで「現代の主要な運動は……どれをとっても、そこに登場する数多くの名前の一覧を見るだけで、新しい改革論は本質的にケルト族の産物であるのが、すぐわかる」¹⁰ と、述べている。確かに、ラファエル前派（特にバーン・ジョーンズ）の女性像のモチーフ、ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスの螺旋模様、オックスフォード・ムーヴメントなど芸術から宗教にまで、ケルト意識は表れている。

エルネスト・ルナン（Ernest Renan）による『ケルト民族の詩歌』（1859年）が英語に翻訳されたのは、1896年のことであった。そのなかで、彼はケルト民族の歴史を、「流浪の民族の一つの長い哀歌」にたとえている。ケルトは本質的に「女性的」特徴と豊かな想像力をもち、未知への探求心に溢れていることを指摘している。「ケルト人の詩的生活の本質的な要素は、冒険—すなわち未知のもの、欲望からいつも逃げていくものを限りなく探求すること—である。これこそ聖ブランダムが夢見たもの、ペリディアが秘伝の騎士道精神を抱きながら探し求めたもの、騎士オーエンが地下の旅で求めたものであった。この民族は無限なものを願い、渴望し、あの世までも、地獄の向こうまでも、何がなんでも追い求めるのである」。¹¹ また、ローマ人と異なる点のひとつとして、ケルト族が明確な来世の信仰を持っていたことで

ある、と述べている。(56頁) 総じて、ヨーロッパの文学の主題はケルトの才によるところが多かった、とルナンは述べている。

ルナンに続いて、マシュー・アーノルドは『ケルト文学の研究』を発表した。これは、1865年から1866年までのオックスフォード大学での講義を『コーンヒル・マガジン』(*Cornhill Magazine*)に掲載し、1867年に単行本として刊行したものである。彼の著作はイングランドにおけるケルト像の変化に大いに寄与するものとなった。彼はケルト民族を、ヴィクトリア朝の中流階級に代表されるフィリスティニズム (Philistinism)、つまり無教養 (俗物主義) を補完する存在として位置づけた。アーノルドは『ケルト文学の研究』の序文でそのことを述べている。

We in England have come to that point when the continued advance and greatness of our nation is threatened by one cause, and once cause above all. Far more than by the helplessness of an aristocracy whose day is fast coming to an end, far more than by the rawness of a lower class whose day is only just beginning, we are imperilled by what I call the “Philistinism” of our middle class. On the side of beauty and taste, vulgarity; on the side of morals and feeling, coarseness; on the side of mind and spirit, unintelligence,—this is Philistinism. Now, then, is the moment for the greater delicacy and spirituality of the Celtic peoples who are blended with us, if it be but wisely directed, to make itself prized and honoured. In a certain measure the children of Taliesin and Ossian have now an opportunity for receiving the famous feat of the Greeks, and conquering their conquerors.¹²

大意は次のようである。イングランドの私たちは、ある局面に到達している。それは、我が国の進歩や偉大さが、ひとつの原因によって脅かされている時期のことである。無力な貴族の時代が終焉に近づこうとしているからでもない、下卑た下層階級の時代が始まろうとするからでもない。それ以

上に、中流階級の「フィリスティニズム」に危うくされているのである。審美的な面では、俗悪さが、モラルの面では品格を欠き、精神面では無知が彼らを支配している。これがフィリスティニズムなのである。今こそ、ケルトの人々の繊細さや精神性が求められる時期であり、私たちは彼らと溶け合わなければならない。

アーノルドは「ドーヴァーの岸辺」(‘Dover Beach’) でその時代の精神的状況を表現している。

かつては、信仰が、いや、信仰の海が、
この海原と同じように漫々と水を湛え、
燐めく帯の襷さながらに、地球の岸辺をくまなく囲んでいた。
だが、私が今耳にしているのは、ただ、その海の
愁いをおび、陰にこもった長い唸り声にすぎない、—
それは、夜風の息吹とまざり合い、この世界の
荒涼無残な極限の彼方へ、一裸の小石が
空しく群がっているあたりへ、と流れてゆく声なのだ。(平井正穂訳)

The Sea of Faith

Was once, too, at the full, and round earth's shore

Lay like the folds of a bright girdle furl'd.

But now I only hear

Its melancholy, long, withdrawing roar,

Retreating, to the breath

Of the night-wind, down the vast edges drear

And naked shingles of the world.

また、この世での栄達よりもジプシーの群の中で放浪しながら精神世界を求めることを述べた、有名な詩「スコラー・ジプシー」(‘Scholar Gypsy’)

では、アーノルドは世紀末の人々に取り憑いた病について述べている。そのジブシーはケルト世界ともいえよう。

だが今は、現代生活のこの奇妙な病に取り憑かれ
病的なまでせっかちに、目的も定めぬまま、
頭脳を酷使するあまり、心が麻痺してしまった―

Before this strange disease of modern life,
With its sick hurry, its divided aims,
Its heads o'ertax'd, its palsied hearts,

ついでながら、アーノルドのケルト文学に関するエッセイとこれらの詩が書かれたのと、ほぼ同年に、ジェームズ・トムソン（James Thomson 1834-82）が、同時代人の孤立感をいち早く感じ取り、夜の都市風景に表現しているのは興味もたれる。

アーノルドはこのような当時の人々心を癒すものとして、「ケルト」を用いた。言い換えると、それをイングランドのアイデンティティに重ね合わせることによって、補完的要素を取り込もうとしたといえる。彼の『ケルト文学の研究』から窺えるケルト像をつぎに検討してゆきたい。彼は時代が科学重視の傾向にあることをのべ、事物をあるがままに知る科学の意義を認めている。そのあと、つぎのように続けている。

このような科学はこれまでめざましい進歩を遂げてきた。人生の半ばにある私たちの記憶のなかでさえ、科学の進歩はケルトへの共通理解に影響を与えてきた。そしてまた、この変化は、科学―事物をあるがままに知ること―が有益で実質的な意義をもたらすのかもしれないことを、示している。若い頃、私はケルトをチュートンとは大きな隔たりがあるものと教えられてきた。とくに私の父はそれらを比較することすらしな

かった。彼は、地球上のいかなる民族よりも、チュートンとケルトとの間には隔たりあることを、繰り返し述べたものだ。おなじように、リンドハースト卿は、冗長だが有名な言葉で、アイルランド人を「言葉、宗教、種族において相容れない民族」と呼んでいる。当然のことながら、こうしたことは深い溝を生み出した。それは、政治的、宗教的な違いによって私たちとアイルランド人との間に今まであった不和を、増幅したのである。こうした不和は、計り知れないものであり、修復しがたく、致命的なものに思われた。¹³

そして正当なケルト研究によって、イングランドとケルトとの間の垣根と偏見が払拭され両者の距離は縮まるのだと、述べている。さらにアーノルドは、ルナンと同じように、「ケルト」が重視するのは内面的世界であり、物質的な外的世界ではないと述べている。別の言い方をすれば、アングロ・サクソンの体現する男性的要素・物質文明に対抗しうるものとして、ケルト像は女性的要素・精神文明を意味するもの、と彼はみなした。その結果「ケルト」は繊細で想像力豊かな民族となったのである。アーノルドは、この女性的な「ケルト」像をルナンの影響によって抱くに至った。のちに、イエイツはルナンの著作を読みながら、その余白に「繊細」、「女性的種族」、「女性的理念」などのケルト族の特徴をコメントとして書き添えたといわれる。アーノルドのケルト民族異質論は政治的な観点から生まれたものでないだけに、多くの文化的影響を与えた。彼は、「ケルト」の性質を重ねることで、ゲルマン民族という体質のイングランドに、女性的、感性的な民族という装飾を付与することができた。

これを示す現象のひとつは、アイリーン（Erin）の登場である。アイリーンとは、1880年代から世紀末にかけて、ダブリンとロンドンの中産階級対象の風刺漫画雑誌にさかんに掲載された、憂いを帯びた表情の美女である。彼女は、アーノルドが語った感性豊かで「女性的」なケルト民族像の特徴をもち、典型的なアイルランド人像の一つとなった。よくみうけられたのは、

アイリーンがシャムロックの首飾りをつけ、猟犬とハーブを前景にする構図である。¹⁴ このようなアイルランド人像もルナンやアーノルドの影響のひとつと言える。彼らは、もはや「ヤフー」ではなくなり、「アイリーン」へと大きく変化を遂げたのである。

さて、アーノルドのケルト像をさらに発展させ、そのなかの感性・想像力の面を強調したのは、グリアソンである。彼は、ケルトの文学には他民族と大きく異なる特徴があることを、つぎのように述べている。

文学においては、ケルト的気質は、想像力、情緒そして名状しがたい詩的神秘（an indefinable sense of poetic mystery）によって特徴づけることができる。しかし、その文体には、激しいまでの個性が示されている一文体とは、あらゆる情熱的な詩芸術のように、個々の人々から自然にほとばしるものである。なぜなら憂鬱と情熱は独特の表象と象徴を生み出すと同時に、模倣という制約のなかに留まることを禁ずるのであるからなのである。¹⁵

グリアソンのみたケルト像は、サクソンの知性に対して、ケルトの感性を復活させるものに他ならなかった。次のようなイエイツの主張には彼らの強い影響が感じられる。同じ頃、イエイツは、「文学にみるケルト的要素」のなかでルナンとアーノルドに詳細に言及し、「ヨーロッパ文学の源泉のなかでケルト系のみがヨーロッパ文学の本流の間近にあった」と述べたあと、「ケルト民族運動」とはこの源泉を解放する運動であると語っている。

「イングランドがどこからもの悲しい性向を譲り受け、魔力の才をとり入れたか」と、もし尋ねられるなら、「私は自信をもって、その大部分はケルトからであると答え、また、確信をもって、その才の大半はケルト起源であると答えるであろう」と、マッシュウ・アーノルドは語った。私はこれを別の表現によって、文学はつねに古代の情熱や信念にみなぎ

っていないければ、たんなる、事実の記録、または情熱の伴わない空想、情熱の伴わない瞑想になり下がるであろう、と言いたい。また、ヨーロッパにおいて古代の情熱や信念を生みだした源泉といえば、スラブ系、フィンランド系、スカンジナビア系、ケルト系が挙げられるが、それらのなかで数世紀にわたりヨーロッパ文学の本流の間近にあった源泉は、ケルト系のものだけあり、それは何度もヨーロッパの芸術に「過剰なる」「生命力」を吹き込んできたのだ、と言いたい。¹⁶

世紀末文化から今世紀にかけてのケルト意識は、当時の人々が感じた物質主義への反発と閉塞感のなかで、イングランドにおいては、「古代の情熱や信念」を吹き込むものであり、すでに喪失した古き良き過去を懐古させる契機となるものであった。かたやアイルランドにおいては、自国文化への覚醒と政治意識とが相俟って、演出されたものだった。そして先ず、イングランド側でケルトへの関心が生まれてから、アイルランドで自国文化への関心が呼び覚まされていくパターンが、一般的だった。これは、イエイツの「文学にみるケルト的要素」にもみてきた通りである。自国文化への覚醒は、アイルランドに限ったことでなく、スコットランドなどに代表されるケルティック・フリンジ（イングランド周縁地域文化）についても当てはまる。ケルト現象といわれるものをいくつか挙げてみると、この頃イングランドで活躍した詩人グループのひとつに「ライマーズ・クラブ」がある。彼らは1892年と1894年の二度にわたって、『ライマーズ・クラブ詩集』（*The Book of Rhymer's Club*）を出版している。16人の詩人からなるメンバーの大半はケルティック・フリンジの出身であった。そのなかには、ジョン・ダヴィドソン、アーサー・シモンズ、アーネスト・ドーソン、エドウィン・エリス、ル・ギャリエン、アーネスト・リー、イエイツなどの名前が窺える。

また同じ頃、スコットランドではウィリアム・シャープ、フィオーナ・マクラウドらが中心となって、ケルト復興運動をおこした。季刊誌『エヴァーグリーン』（*Evergreen* 1895年創刊）はその運動の中心となった。アイルラ

ンドのイエイツとスコットランドのシャープはケルト文芸復興の指導者として親しくなるが、マクラウド（Fiona MacLeod）とは男性作家シャープ（William Sharp 1855-1905）の女性名であり彼のペンネームであることを、イエイツが知ったのは、1897年になってからであるといわれる。¹⁷ 近年発表されたイエイツの書簡集によれば、それまでイエイツは、女性としてのマクラウドのケルト世界に一方ならぬ関心を抱いていたことがわかる。彼女は、直感、本能、感傷、脆弱、受動的、迷信的といったキーワードによって、ケルト世界の人々を描いている。マクラウドの小説は20世紀のケルトをミステリアスに描くのに大きな役割を果たした。シャープもまたケルト復興の役割を担った。シャープはケルト文化をアーノルド的な脈絡の中で描きケルト的要素をイングランドと対比させようと試みた。¹⁸ イエイツは、書評でマクラウドを次のように評している。「確かなのは、（マクラウド）は、ケルト精神を抱きそれを信じる人たちのように、太古の世界を開く扉の鍵を持っていたことだ。その世界は、民族が物質的進歩に身を投じた結果、繁栄する民族の背後に隠されていた」。¹⁹

現代北アイルランドの詩人シェイマス・ヒーニーは、イングランドとアイルランドの歴史を男性と女性というアルージョンに置き換えている。ここでも、アイルランドは支配を受ける女性となっている。

私は今なお、帝国のように
お前に苦痛を与え続ける男、
植民地で搾取する過程を、
破城槌、内部からはじける轟きを
（ヒーニー、「併合法」）

And I am still imperially
Male, leaving you with the pain,
The rending process in the colony,
The battering ram, the boom burst from within.

(Seamus Heaney, 'The Act of Union')

アーノルド以降のケルトについてみられるのは、文化的支配様式としてのオリエンタリズムであり、ケルト像を自らの言語や文化の枠組みで「表象」することに他ならない。ケルト像は、サクソンを補完するものとして意義があり、「女性的要素」、「支配されるもの」、「繊細な感性」、「精神的世界」など、現代のアンチテーゼの意味を持つようになった。それは、このヒーニー



第3図 リチャード・ドイル、『妖精物語の下絵』National Gallery of Ireland 所蔵

の思想にも通じるものとなっている。

お わ り に

世紀末イングランドにおけるアイルランド像を中心にしながら、ケルト文化復興を探ってきた。そもそも「ケルト」という語は本来のヨーロッパのケルト民族を意味するよりも、イングランド側では、アイルランドなどの周縁部を差別化する用語として、用いられた。イングランドからみるとケルト像は時の流れによって大きく変化した。風刺漫画の類型によって示すと、18世紀までのアイルランド人像は、「野蛮」の同義語と見なされ、「ヤフー」のごとく描かれた。やがてケルト像は浪漫主義の波と相俟って「高貴なる蛮人」へと変貌してゆく。19世紀末には、アーノルドの『ケルト文学の研究』によって、感情的性質、つまり女性的要素と神秘性が付与されていった。その典型は「アイリーン」である。また、イングランドの挿絵画家リチャード・ドイル (Richard Doyle 1824-83 父祖はアイルランド) などに代表される妖精を主題にした挿絵の流行もケルト像の変化の一端を示している。[第3図]

スペンサーとスウィフトのアイルランド像を原点にしながら、民族意識に目覚めた時期には、猟犬のように凶暴な「男性的」アイルランド人像がうまれ、世紀末にはケルトを繊細で想像力豊かな民族として見なすようになった。その結果、イングランドの「フィリスティニズム」を補完する存在、つまりアングロ・サクソンの男性的要素・物質文明に対峙しうるものとして、ケルト像は女性的要素・精神文明を意味するものとなっていった。一言でいうなら、ケルトはイングランド自身の内面を映し出す鏡へと変化したのである。

[注]

1. Seamus Deane, *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature - Joyce, Yeats, O'Casey, Kinsella, Montague, Friel, Mahon, Heaney, Beckett, Synge* (Faber and Faber, 1985), p. 13-5.
2. *OED*で、'nationality' は1691年、'nationalist' は1715年、'nationalism' は1836年

が初出。

3. Bruce Arnold, *A Concise History of Irish Art* (Thames and Hudson, 1969), pp. 115-27.
4. Murray G. H. Pittock, *Celtic Identity and the British Image* (Manchester: Manchester U. P., 1999), p. 25.
5. Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* (London: Norton, 1970), p. 243.
6. A. L. モートン著『イングランド・ユートピア思想』(東京未来社, 1967), 133頁。
7. L. P. Curtis, *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature* (Newton Abbott: David & Charles, 1971), p. 100.
8. サッカレー著, 齊藤美洲訳, 『サッカレー・ハーディ世界文学大系40』(東京: 筑摩書房, 1961), 39頁。
9. G. K. チェスタトン, 安西徹雄訳, 『G. K. チェスタトン著作集 4 巻: ジョージ・バーナード・ショー』(東京: 春秋社, 1991), 16頁。
10. ホルブルック・ジャクソン著, 澤井勇訳『世紀末イングランドの芸術と思想』(東京: 松柏社, 1990), 179-80頁。
11. Ernst Renan, tr. William G. Hutchison, *Poetry of the Celtic Races, and Other Studies* (London: Kennikat Press, 1896), p. 9.
12. Matthew Arnold, *The Study of Celtic Literature* (London: Kennikat Press, 1905), p. x.
13. Ibid. pp. 14-6.
14. L. P. Curtis, p. 75.
15. Francis Grierson, *The Celtic Temperament and Other Essays* (London: Kennikat Press, 1901), pp. 35-9.
16. W. B. イェイツ, 鈴木弘訳, 『善悪の観念』(東京: 北星堂, 1974), 220-21頁。(一部改訳)
17. William F. Halloran, W. B. Yeats, William Sharp, and Fiona Macleod: A Celtic Drama 1897, in W. Gould ed., *Yeats and the Nineties* (London: Palgrave, 2001), p. 159.
18. イェイツの友人のジョージ・ラッセルは, 「ニューアイルランド・レビュー」の中で, シャープの思想は不健全であり, まがいもののケルト主義だとして批判した。
19. *Uncollected Prose by W. B. Yeats*. Vol. II. Eds. John P. Frayne and Colton Johnson (London: Macmillan, 1975), p. 45.

The Celtic Revival and Arnold: Yahoo and Eiren

KUSAKA, Ryuhei

At the *fin de siècle*, the Celtic Revival was complex and multifaced movement, comprising a variety of approaches to the representation of Irish identity. In this paper, the influence of Matthew Arnold on the Celtic Revival will be mainly explored. He created a stereotyped image of the Celt as a “shy, sensitive and imaginative” race. The Irish people have greatly changed their image from what they used to be in the eighteenth century. The image of Irishman in England can be traced back to the age of Edmund Spenser and Jonathan Swift. Yahoo represents the savage people whom Jonathan Swift described in *Gulliver's Travels* (1726). The description of the Irishman as Yahoo was found in the cartoons and writings of the eighteenth century. Eiren, on the other hand, was a gloomy and beautiful woman, with long and dark hair. She was often drawn in the cartoons of the magazines at 1890s. The inclination for nostalgic representations of the Celt could be found in the figure of Eiren.

In the first section, the discovery of the Celtic motif will be discussed in connection with the rise of Irish nationalism in the middle of the eighteenth century. The traditional Irish symbols such as the Celtic Cross, harp, and Irish wolfhound, will be referred in the poems and paintings.

In the second section, I will deal with the image of the Irishman as Yahoo, in *Gulliver's Travels* and the cartoons of *Punch*. In the last section, the Celtic Revival and the transformation of the Irish image at the end of century will be discussed. The figure of Erin suggested Irish femininity itself. This figure of Erin cannot be separable from Arnold's opinion.

As a critic points out, the Celt is a construct based on oppositions such as wild and tame, savage and civilized, or idealist and utilitarian. In this paper, an ambivalence in English attitude towards the Celt will be also explored.